

地方美術館の場所論

— 山口県立萩美術館・浦上記念館の場合 —

荒 木 正 見

序

小論は、哲学的場所論の視点から博物館や美術館のあり方を考察する試みの一端である。小論では特に、地方美術館の立場から、むしろ地方であることを有効に生かした運営をしている山口県立萩美術館・浦上記念館における調査をもとに、地方美術館のあり方を考察するものである。

筆者は先に、拙論「博物館の場所論」（福岡女学院大学人文学研究所紀要『人文学研究 創刊第一輯』一九九八、一—三三頁）において、場所論的な立場から見た博物館のさまざまなあり方を考察した。考察は、後述するような西田幾多郎の場所論から導かれた概念、「場所の自己限定」と、「個別的な存在による場所の限定」という双方向的な視点をもって行われた。調査した博物館はそれぞれに、その双方の限定をそれぞれの事情に応じて被り、それぞれの事情に応じたバランスの上に成り立っていることが明かになった。そして、その事情がこれらの自己限定のバランスのどこに位置するかをわきまえて設立や運営を行えば、それぞれの博物館本来の効果的な運営が出来ることも明確になった。しかもその場合、場所の地理的意味

だけではなく、心理的、歴史的な意味での総合的な場所の意味を探究することが必要だということをも明かになった。小論は、このような考察の延長線上にある。従って、考察の骨格と方法は比較する意味でも先の拙論の方法を踏襲する。

ところで博物館や美術館において、人口密集地におけるものは、おおむね多くの入館者を集めることができるが、地方の多くのそれらの施設では、入館者数を確保することに苦労している。先の拙論では、秋吉台科学博物館が、設立場所を生かし、それに館独自の工夫と努力を重ねて、入館者数の確保に努めていることを報告した。小論では特にこのたび、山口県立萩美術館・浦上記念館がその点で成功していることを調査した結果をも報告するものである。なお当該館について前もって特筆すべきは、当館が理想的な理念を追求しつつ、現実的な運営でも成功しているということであり、小論ではその点について、場所論的な立場からの理由をも明かにする。

1 場所論の視点

まず、小論を貫く考察の方法について要点をのみ纏めておく。

西田幾多郎の場所理論における「場所」とは本来、唯一絶対の存在そのものを意味する。『西田幾多郎全集 第四卷』（岩波書店、一九四九／一九八八以下『全集四』と記す）所収の論文「場所」（大正一五年）によれば、西田幾多郎における「場所」とは哲学者が常に問題にしている存在に対する西田幾多郎名りの名称および概念で、主観と客観の区別をも含めたあらゆる意味における区別が存在しないような全体を意味し、その全体は全体として有機的な関係を保つものだとされ、我々が事柄を認識したり感情を持ったりして自覚する意識現象は、その全体の内に、いわば全体の構成によって成立するものだとされる（『全集四』二〇八—二〇九頁）。意識現象の背後に、実はその意識現象さえ含んで、無限の広がりをもつこの存在は、真の意味での唯一絶対的な存在である。

「場所の自己限定」とは、個別的な事柄はすべて、このような全体としての「場所」による、場所自身に対する自己限定だということとを意味する。この時、事柄の成立に関して重要な媒介になるのが意識である。いかなる事柄も、例えば物質的な存在であれ、意識に現れて初めてその存在が確認される。ということとは、意識が捏造している可能性も考えられるが、意識活動も全体としての存在、すなわち場所の構成によって成立しているので、結局は、すべての事柄、個別的な存在は場所自身の自己限定によって成立していることになる。このように意識が関わる場所自身の自己限定を、西田幾多郎は「自覚」という。普通自覚とは、単なる意識作用のみ指すが、『西田幾多郎全集 第六卷』（岩波書店、一九四八／一九八八以下『全集六』と記す）所収の「無の自覚的限定」（昭和七年）では、この

ような意味で、「自覚的限定」というのは場所が場所自身を限定することである（『全集六』九四頁）と、意識による事柄の成立、すなわち限定と、場所自身の自己限定を同じ事だと述べられている。

「個による場所の限定」とは、「場所の自己限定」とは逆方向のダイナミズムである。「場所」は、絶対的存在であるから、個別的な存在に対しては、存在根拠として優位に立つ様にみえる。しかし、「場所」は絶対的であるがゆえに全体としては「無」だとしか認識できない。すなわち「場所」が「場所」として認識されるためには、認識可能な個別存在を通してその背景および総体としての絶対者という認識を得なければならぬのである。すなわち、この意味で、「場所」は個に依存している。『西田幾多郎全集 第十四卷』（岩波書店、一九五一／一九八八以下『全集十四』と記す）所収の「現実の世界の論理的構造」（昭和八年）では、個物と一般、すなわち「場所」の関係については、「どちらが基礎として、どちらの方がそれに包まれるとかいうことは無い」（『全集十四』四七〇頁）とされ、双方は概念上は絶対に相反するものであり、同時に存在としては一つであるとされている。

このように「場所の自己限定」と「個による場所の限定」は逆方向のダイナミズムでありながら、同時に個を成立させているものであるが、現実的な個別存在が、例えば小論では一個の美術館が、そのダイナミズムをどのように実現しているのかについては、現実の観察を行うとともに、その歴史的なあり方をも検討しなければならない。『西田幾多郎全集 第八卷』（岩波書店、一九四八／一九八八以下『全集八』と記す）所収の「行為的直観」（昭和十二年）には、我々自身が種という普遍的存在から生まれ、つまり限定され、

同時に、個として自己自身を限定するが、それはまた、我々の行為が歴史的・社会的だということを意味しているとされている（『全集八』五六八―五六九頁）。すなわち、我々という個において双方のダイナミズムが調和するその姿が、社会や歴史において示されるというのである。

小論の考察の骨格を為す「場所」理論の要点は以上であるが、その理論の視点から見れば、具体的な美術館が、美術館自体の目的や理想をどのように実現し、さらにどのような可能性を導こうとしているのか、が論理的に確認されよう。以下それを考察する。

2 山口県立萩美術館・浦上記念館の概要と場所による自己限定

当美術館は、山口県萩市平安古（ひやこ）五八六一―に設立され、平成八年一〇月一四日に開館した。立案から開館までほぼ四年かかったという。設立の契機になったのは、その名称にも示されるように萩出身の実業家、浦上敏明氏が、浮世絵や、中国や朝鮮の陶磁器などの多くの美術品を寄贈されたことにある。総工費は約五三億円、年間総経費は約三億五千万円という規模である。

当美術館発行の『HAGI URAGAMI MUSEUM 山口県立萩美術館・浦上記念館』（平成八年、以下同誌は『H・U・M・』誌と表記する）によると、施設概要は次の通りである。

敷地面積 一一、七一五・〇平方メートル（三五四三・七九坪）
建物概要 構造 鉄筋コンクリート造り地下一階地上二階

建築面積 三一九四・一平方メートル（九六六・七二坪）

坪)

延床面積 四、九九〇・〇平方メートル

最高高さ 一九・八メートル

軒高 一一・五メートル

工期 平成六年一〇月二一日～平成八年三月二七日

日

設計監理 丹下健三都市・建築設計研究所



写真1 山口県立萩美術館・浦上記念館

まずこの施設概要に関して、その設計理念には「場所の自己限定」が反映している。

『H・U・M・』誌には、その冒頭に「萩の風土と歴史との調和」として、萩市の歴史的景観を特徴づける一つの要素としての、「連続した横長の平面や土塀、細長い建物」という形態があり、この美術館では、その形態をデザインに組み入れ、建築形態の主な構成要素にしていくとされている。たしかに、中心を為す棟の平面図は、一対五という比率のほぼ南北に細長い四角形を為し、それに「キ」の字の横棒のように、東西方向に二本の附属棟が設置されている。上の横棒より北の部分が研究・管理エリアとなっており、上の横棒を含む南の部分が表示・アメニティエリアとなっている。

特徴的なもののひとつは一階の西、二本の横棒のちょうど間に、

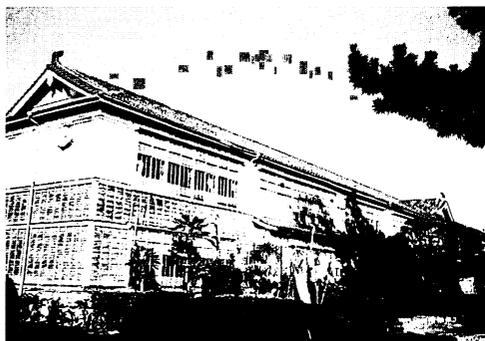


写真2 萩市立明倫小学校校舎

「示空間」だとされている。この記述だけでは解りにくい点もあるが、当美術館の約五〇メートル東にある萩市立明倫小学校の堂々たる木造校舎を見れば、それが納得される。萩市史編纂委員会『萩市史 第三巻』（萩市、昭和六一年）によると、明倫小学校の端緒は、萩藩五代藩主毛利吉元が享保三年（一七一八）一二月に、萩城三の丸追

上の横棒の西の端にある特別展示室および茶室兼和式展示室から斜めに展示室2と展示室1とが雁行状に設置され、展示室1が縦棒部分にあるロビーに開口しているという点である。この構造については、『H・U・M.』誌に「城下町の特徴である鍵曲がり雁行した展示室の構成や内部空間に応用」とされているように、城下町萩の基本的な道筋の構造を模したものである。

二階部分の展示室は、「キ」の縦棒と下の横棒との交点に展示室5を置き、その東が展示室6、西が展示室4、北が展示室3となる。特に、要となる正方形の展示室5は、自然光を真上から入れることができるように電動のサンルーフを設置し、移動式ガラスケースと座席とを配置替えすれば、展示室にも休憩室にも使えるという工夫が為されている。『H・U・M.』誌によれば、この二階部分展示室は「敷地の東側にあたる萩市の行政・文教エリアの環境に対応した細長いボリュームをもった展

示空間」だとされている。

この記述だけでは解りにくい点もあるが、当美術館の約五〇メートル東にある萩市立明倫小学校の堂々たる木造校舎を見れば、それが納得される。萩市史編纂委員会『萩市史 第三巻』（萩市、昭和六一年）によると、

明倫小学校の端緒は、萩藩五代藩主毛利吉元が享保三年（一七一八）一二月に、萩城三の丸追

い回し筋に創建した藩校明倫館にあるとされる（『萩市史 第三巻』七九七―七九八頁）。それが現在地、江向に移ったのは嘉永二年（一八四九）正月で、敷地一万五二八四坪、建物総坪数一万一三二八坪、練兵場三〇二〇坪という広大なものであったと述べられている（『萩市史 第三巻』七九八頁）。萩市史編纂委員会『萩市史 第二巻』（萩市、平成元年）によると、明治五年（一八七二）に学制が公布され、萩も小学校が出来、それらを統合し、また分割したり

などの変遷を経て、明治四二年（一九〇九）一月に、明倫尋常小学校として統合し、現在に至っているとされる（『萩市史 第一巻』一四九頁）。その校舎全体も壮麗とさえいえる姿だが、校舎群の中では特に国指定史跡となっているのは有備館である。この建物は「旧明倫館の剣術場と槍術場を写して拡張したもので、木造一重入母屋造り棧瓦葺き平家建て、桁行三七・八メートル、梁間一〇・八メートルの南北に細長い建物」（『萩市史 第三巻』八〇〇頁）とされるように細長い構造をしており、他の細長い校舎とともに歴史的な学校風景を示しているのである。

さらに、『H・U・M.』誌では、建物の外観にも「歴史的地区に見られる石壁や石垣、石彫公園など、石の造型をデザインに取り



写真3 山口県立萩美術館・浦上記念館の石造のオブジェのあるテラス

入れ、主な仕上げ材料を石にすることによって、色彩や材質が萩の景観に調和するよう配慮」されたことが言及されている。

このように、当美術館の建物の概要は、とりあえずは、萩という場所が強く影響を与えたという意味で、「場所の自己限定」のダイナミズムが強く働いたといえる。このことは、萩市民や萩を訪れる観光客にとって、町並みの延長という感覚で、親しみ易いという長所がある。

萩市そのものの場所論的考察は、紙数の関係上、稿を改めなければならぬが、毛利氏三六万石が江戸時代を通じて二三代、二六〇年間の中核的城下町として維持してきた萩の町は、吉田松陰をはじめ明治維新へと歴史を遂行した数多くの人物にまつわる史跡の宝庫でもある。また、毛利氏が庇護した萩焼の窯が周辺地域も含めて一〇〇以上もある美術の町でもある。このような萩の町を訪れる観光客は、自ら歴史や美に対する意識が高く、萩の新しい美のメッカとして、当美術館を訪れるのである。当美術館はこのような人々を引きつけるべく設計されたことをも意味している。

しかし一般論として、「場所の自己限定」のダイナミズムのエネルギーが強すぎると、個が場所の下位に位置づけられ、個そのものの意義が希薄になるおそれがある。ある集団の全体的な価値観が個性を抹殺すれば全体のエネルギーさえ消滅してしまうように、ある場所全体のエネルギーが個を呑み込んでしまえば全体も消滅してしまうのである。

どの土地にあっても、美術館は美術館としての普遍的な役割があるし、特定の美術館にはその美術館特有の目的や理念もある。それは、時には場所とは無関係に展開するし、建物そのものに反映され

ると共に、特に運営の理念と実践に実現されて、そこから逆に場所を限定するのである。次節は、そのことを検討する。

3 山口県立萩美術館・浦上記念館における個による場所の限定

「個による場所の限定」の最も重要な点は、場所が全体としては同時に認識され得ないのに対して、それぞれの個が個性を発揮することで、場所を露わにする、という点である。すなわち、場所が場所として認識されるのは常に個を通してのことである。そのような意味で、場所は個に依存している。

これは、唯一絶対の存在たる「場所」について述べられたことではあるが、特定の場所に関しても同様に述べることができる。例えば、「萩という町」といったところで、そこに存在する史跡や観光地や生活している人々が認識されなければ、何の实在感も存在しない。そして、それら個々の存在は必ずしも常に萩の町全体を考慮しつつ存在しているわけではないし、それどころか、自らの個を個として発展させ、守ろうとしているようにさえ見える。そして、それらの自由な諸活動が、結果において町全体を活性化させているようにも見える。もちろん、それらの背後には、常に、場所が横たわり、個に影響を与え、時には、全体をも考慮しなければならないことを自覚させるのである。

さて、当美術館においても、施設、理念、運営のあらゆる面において、個性を発揮するために、美術館一般の普遍的機能を充実させる努力が遂行されている。

まず、理念の最も中核にあるのは、足立明男館長が「文化の光を掲げたい」「本物の文化を発信したい」「施設、展示いずれも、そのものに普遍性をもたせる」と語られるように、美に対する高度な感性と知識の養成である。そのためにはまず、美術館そのものの高度な研究の充実が必至である。

一九九八年現在、専門職は六名。専門職としての質を維持するという目的で、学芸員資格を持ち、原則的に修士、ふさわしい語学力のあるもの、等というのがその条件である。

さらに、その能力を発揮すべき充実した仕事を遂行する際の職務上の疲労感を少しでも和らげるように、設計上、執務室から自然景観がよく見えるように配慮されている。また、肉体的労力を省き、無駄なエネルギーを浪費しないための工夫として、展示ケースは前から出し入れできるようにしてあり、照明はリモートコントロールになっている。

このような職員による、日常の展示が充実していることはいうまでもないが、文化の発信媒体として発行されている季刊誌「萩」は、単なる情報伝達の域を越えてオールカラー全一二頁、学芸員によって、専門的な内容が分かりやすく解説された記事で埋められた高度なもので、一九九八年一〇月現在第九号を数える。

それら職員の活動を支える資料、収蔵の工夫としては、階段下などのデッドスペースの有効利用や、また、単に平面図として見るのではなく立面図として検討し、床を五〇センチ下げ、書庫を二段にしたり、収蔵庫の天井を高くして収蔵スペースを二段にしたりなどがあげられる。

次に、利用者のための工夫である。

利用に関して足立館長のお話では、「生活のリズムに溶け込んだ美術館」を目指し、ひところよく言われた「余暇の利用」といった消極的な目的ではないとされる。もちろん、日常の生活をそのまま持ち込むのではなく、日常を離れて高い意味でのリラクスタイトムを得る場だという意味である。従って非日常の工夫も為されている。その典型としては、ガラス張りなどの質の高いトイレや、アメニティ・エリアとしての明るく天井の高いコーヒールウンジがあげられる。また、それに隣接する開放的な図書閲覧コーナー（兼ミュージアムショップ）には主に日常の購入が難しい高価な書物が揃えられている。

さらに、身障者や老人には、オールスロープとエレベーターによって対応している。

このように、当美術館は、高度な文化を追求するという理念を、個として実現するために、施設、職員ともに充実し、活動していることが明かになった。

しかし、周到な当美術館ではあるが、今後設立される施設への参考までという足立館長のお話では、ひとつ設計上の難点を挙げられた。それは、館全体をスムーズに巡ることができるような循環方式を追求した結果、逆流や中途退出がし難いという点である。この点は例えば、福岡市美術館の展示エリアが、それぞれ二乃至四に分割できる小スペースを有する五つの独立したエリアで構成され、各エリアへの出入りが自由なのに比べると、確かにそのような印象を与える。が、また他方では、スムーズな人の流れを維持できるという長所もある。このような設計の問題は、高齢の利用者が一層増加する今後に向けてのひとつの課題である。

さて、これまで述べてきた限りにおける当美術館のこのような試みは、建築物としての美術館そのものの範囲内で、その活動を高度に充実させるという側面からのものであった。それは、「文化の光を掲げる」という言葉に見られるように、美術館の機能を、美術館の普遍的な目的に向かって可能な限り高度に追求し、そのことで美術館自体の存在意義を見いだそうという方向性を持つものであった。これは「個による場所の限定」のダイナミズムに相当する。一般論として、このダイナミズムにおいて必要なことは、個が個として、高度な充実を要するという点である。その意味では、当美術館の試みは適確だといえる。

ところで、さらに一般論として、このダイナミズムの弱点も指摘される。それは、個の独走である。美術館のように個が活動をも持つ場合、その運営や展開のしよによって、場所とかけ離れた方向に独走する可能性も指摘される。本来は、個と場所とは一体なのだから、この独走は、個の生存にとっても致命的である。

当美術館は、その危険を避けるために、どのような工夫をしているのか。それが次節の課題である。

4 山口県立萩美術館・浦上記念館における個と場所の相互関係

運営方針において、当美術館は、他の既成の地方美術館に比べ、やや高踏的な印象を与えるかもしれない。時には、「地域に限定しない」とし、地域の人たちの趣味的な発表の場は、他の施設を考えると頂くとするような姿勢は、例えば、地方美術館のはしりでもある

福岡県久留米市の石橋美術館が、常時、市民や学生、生徒、学童などの美術展を展示するスペースを確保していることや、一九七九年に開館した福岡市美術館が五つの独立的なエリアのひとつを「市民ギャラリー」と名づけて常時市民の作品展示に利用していることなどに比べれば、そのような印象を与えるかもしれない。しかし、以下に述べるように、現実には、当美術館はそのような方法とは違う仕方、美術館と地域との相互関係を深め双方のエネルギーの調和を図ろうとしている。その場合、美術館は個としての理念を追求し、地域は萩市を焦点として西日本一帯を視野に入れ、さらには、日本全体、東アジア一帯をまで考慮しようとするものである。この努力が、萩市の人口が四万五千人にも関わらず、二年間で三五万人の入館者数を数えることに繋がったともいえる。

まず、美術館施設の萩市民への提供であるが、既述のように、展示に関しては目下のところ一般市民の作品を展示することはないが、講座室は、商工会議所主催の講演会、例えばタクシー運転手や旅館従業員などのための講演会の会場に提供される。

また、美術館が一方的に提供するという形ではなく、地域との具体的な相互協力関係を行うことによって、市民も美術館運営の一員だという自覚を喚起している。例えば、ポスターを貼りたいという店には、ただ招待券を配るというのではなく、チケットを何枚か購入して頂く、というような相互援助の原則を守ろうとしている。

さらに、一九九八年一月一日から七日までを教育・文化週間として、入館料を無料にしているのも、遠方からの来館者にもありがたい企画であるが、とりわけ萩市民にとっては、日ごろさほど美術に関心がない市民でも、近くの公園に行く感覚で美術館に親しむこ

とができ、新たなファンの拡大にも繋がる。

また、地域という考えも、萩市が焦点にあることは当然だとしても、萩市に限定するものではない。足立館長のお話では、人口の〇・一%が美術館人口と考へ、その背景人口を考へて、展示内容に合わせるべき地域全体に発信、宣伝するという基本姿勢を持つことである。従って、多くの場合には、近畿地方を含む西日本がその範囲になる。

また、企画としてはリピーターを呼べる企画を心がけている。そのためには以下の各点に留意されている。

一 高い普遍的な学問的レベルに基づく企画を考へる。

この点に関しては、これまで述べてきた館員の努力と資質によるところが大きい。そして、高い普遍性を持つほど、広い地域からの観客を引きつけることになる。

二 完成した研究者のレクチャーに限定せず、むしろ最新の研究を提供する若手にレクチャーを依頼し、企画に積極性を持たせる。

三 本格的研究のレクチャーを行う。

この二と三に関しては、例えば、季刊誌「萩」（山口県立萩美術館・浦上記念館発行、No.7・No.8、一九九八）によれば、平成一〇年度に行われつつある美術講座は、第一回が大橋康二氏（佐賀県教育文化財課課長補佐）、第二回が浅野秀剛氏（千葉市美術館学芸係長）、第三回が大久保純一氏（跡見学園女子大学助教授）、第四回が小栗祐美氏（北海道教育大学助教授）、第五回が出川哲朗氏（大阪市立東洋陶磁美術館学芸係長）と続いており、新進気鋭の研究内容が語られている。

四 累積性を考慮した企画と象徴性を持つ企画とをバランスよく配

置する。

すなわち、次にはどのように展開するのかと期待させるように発展していく長期的プログラムと、その都度感動を与える短期的プログラムを組み合わせる。

平成一〇年度の企画を瞥見してみてもそれは明かである。

まず、特別展示は、象徴的な意味を持つ短期的プログラムに相当するが、その一部、四月から九月までを書き抜いてみると、次のようになる。

四月二十九日～六月七日「ハプスブルグ家の遺宝―マリア・テレジアの愛した古伊万里展」（展示室3・4・5・6）、六月一日～七月二〇日「北斎―東西の架け橋展」（展示室3・4・5・6）、七月二五日～九月六日「祈りと美の伝承 醍醐寺展」（展示室3・4・5・6）

この期間は、まさに象徴的な意味を持つ短期的プログラムとして、多くの人々にとって分かり易い魅力的なテーマを展示している。

さらにそれに続く次の期間は、長期的プログラムを意識した企画展示を実施している。それは、「シリーズ山東文物1」と名づけられたシリーズの「神秘の王国―鄒国王墓」展である。これははじめ、九月二日～一〇月四日までは展示室3で展示され、次に一〇月一〇日～一月一日までは展示室2で展示され、こゝまでを第一期としている。さらに第二期は、一月二〇日から年末年始の休みを挟んで一九九九年二月二日まで展示室3で展示される。この間、この企画に関連して、記念講演、ギャラリートーク、美術講座などの行事も行われるのだが、とりわけ興味深いのは、九月二三日に行われた、「こどものミュージアムスクール 音ズレのかたち―中国古

代楽器『磬(けい)』づくりに挑戦しよう」である。この部(し) 国王墓の出土品には、古楽器が含まれるのだが、その楽器を模して、自ら鳴らしてのセミナーは、珍しく興味深いだけではなく、次代の美術館愛好者の育成にも繋がる企画である。このような「こどものミュージアムスクール」は、一九九八年度にはこのほかに三企画開かれていた。六月二日「ばらばらまんがをつくるうー北斎漫画の表現に学ぶ」、七月一九日・八月八日・九日「土火と遊び隊(どかつとあそびたい)ーのやきたいけん」、八月一日「もっくもく遊ぼうー埋もれ木に生命を」と、いずれも時々の展示に関連して、しかもこどもたちの実体験を伴うものである。

このように、特別展示や企画展示の一例だけでも、当美術館のきめ細かい企画能力を計り知ることができる。

五 グループリーダーを確保できる企画を考える。

これは、学校単位、職場単位、地域単位、老人ホームなどの医療療育施設単位などのグループが考えられるが、それらのグループを多く確保するためには、地域概念を萩市からさらに広げて、この萩という地から、広範な地域に本物の文化を発信するという意識が必要である。この「本物の文化」というのは、「地域」の概念が広くなればなるほど、より本質的なサービスすなわち本当に美術が好きな人のためのサービスを必要とすることを意味する。そのためには、すでに述べたような普遍性を持ち、きめ細かい展示や企画を行うとともに、館員の行き届いたサービスが必要になる。一例として、館長自ら会場に向いて解説に当たり、その話を聞くためにまた来たいというファンを作る努力もされている。そのような努力から生まれたエピソードとして足立館長に伺ったお話がある。ある夏の日、

車椅子を利用するデイケア施設の老人が来られたので感想を聞くと、まずは、ラウンジで飲んだコーヒーがおいしかったと述べられ、それから「あんな空のような青い色をまた見に来たい。」とおっしゃったとのことである。このようなファンの拡大は、美術館としても嬉しいことである。

六 根底で信頼し合う、ゆるやかなネットワークを志向する。

これまでのすべての努力は、決して強引に人を美術館に縛りつけるものではない。個々の感性や受容性に応じて、おのずからなる人のネットワークである。

さて、このように当博物館においても、「個による場所の限定」、すなわち個が個として普遍的で質の高い企画を有することと、「場所の自己限定」、すなわちその内容を発信する場所によってその企画が支持されて入館者数を確保し、その相互のダイナミズムによってエネルギーの方向が統一され、個と場所の双方が発展していくということが指摘され、個の一方的な独走は行われていないことが明かになった。

結び

これまでを振り返り、場所論の視点から、当美術館の活動において他の地方博物館に比して特徴的な側面を指摘するならば、普遍的な美の追求にみられるような個としての内容の充実を図ることで、入館者数を確保できる能力が高い点が挙げられる。この理由には、これまで考察してきたように、個としての充実と、場所に対する働

きかけの努力が挙げられることはいうまでもない。と、同時に、いま一点、やはり、設立されている萩という場所の力が大きいことも指摘しなければならない。小論の2で述べたように、歴史的町並みを残し、美術に対する関心が深い萩の町だからこそ、一見高踏的な運営に対しても市民の理解を得られ、そのことが新しい美のメッカとして観光客を引きつけるのである。当美術館自身もそのことを自覚して設計され、様々な企画を遂行しているのである。このように、場所は場所自身を限定し、個を支え、輝かせてもいる。この、山口県立萩美術館・浦上記念館は、この「場所の自己限定」を特に効果的に捉え、それを、個のエネルギーに変えて場所自体を豊かにすべく働きかけているともいえる。これは、地方美術館のひとつの生き方を示唆しているといえよう。

小論の今後の問題としては、さまざまな美術館の諸側面を場所論的視点から比較し、より普遍的な美術館像を構築すると共に、より緻密な美術館の場所論を展開しなければならない点があげられる。それに関しては、機会を改めて論じたい。

(あらき まさみ 福岡女学院大学教授)

参考文献(初出順)

- ・拙論「博物館の場所論」福岡女学院大学人文学研究所紀要『人文学研究 創刊第一輯』一九九八
- ・『西田幾多郎全集 第四卷』岩波書店、一九四九／一九八八
- ・『西田幾多郎全集 第六卷』岩波書店、一九四八／一九八八
- ・『西田幾多郎全集 第十四卷』岩波書店、一九五二／一九八八
- ・『西田幾多郎全集 第八卷』岩波書店、一九四八／一九八八
- ・『HAGI URAGAMI MUSEUM 山口県立萩美術館・浦上

記念館」山口県立萩美術館・浦上記念館、平成八年

・萩市史編纂委員会『萩市史 第三卷』萩市、昭和六二年

・萩市史編纂委員会『萩市史 第二卷』萩市、平成元年

・季刊誌「萩」第七号、山口県立萩美術館・浦上記念館、一九九八年四月

・季刊誌「萩」第八号、山口県立萩美術館・浦上記念館、一九九八年七月

・季刊誌「萩」第九号、山口県立萩美術館・浦上記念館、一九九八年十月

*山口県立萩美術館・浦上記念館館長、足立明男氏には、ご多忙にもかかわらず、長時間の聞き取りに応じていただいた。心から感謝申し上げます。